あざみ 4

2007

PDF 制作　俳誌の salon

PDF= 俳誌の salon

萬年山房

山田正平

あそ

四　　月

落椿

東京　佐藤喜孝

落椿鯉の寄りしはいち度きり
天地創造渦なし蟇の蠢めける
蟇軍黄金の蟇内氣なり
陸續と聲なく蟇の蝟集せる
落椿向きをかへたる錦鯉

芽ぶき

埼玉　早崎泰江

家ぬちを小さき蛾のとび冬ぬくし
鵯の嘴みかんの汁の光りをり
古き蔵取り壊されし冬菫
梅咲いて騒ぐ鳥どち賑々し
雪積る林檎園にも芽ぶきあり

弟

東京　堀内一郎

痩せてゆく弟に梅白きかな
見詰めあふ吾と弟よ春深き
自転車を漕ぐ弟にこの世の春
癌ひとつ無罪放免飛花落花
たつぷりとこの世見せたる桜かな

立春

東京　森山のりこ

立春の水とくとくと咽を過ぐ
大寒を恐ることなき日和かな
料峭や魔法の如き吹きガラス
咲き分ける三色椿多摩の里
超人の如きジャンプよ雪の原

初句会

満作や男の髭の不可解な
菜の花や鯨の尾鰭のモニュメント
午后三時障子の端より出て行かれ
もじもじとねだる鳥に風光る
鶫二羽の入りて静かに藪椿

東京　森　理和

紙袋両手に余り日脚伸ぶ
葛湯から春の匂ひも感じつつ
あえかなる風吹く方へ余蘖かな
風花や出さずじまひの角封筒
けふもまた出雲崎から風花す

東京　吉弘恭子

初蝶

埼玉　渡邉友七

てのひらほどの家郷灯るや雪の鵙
泥葱の嵩畦ふさぐ夕鴉
妻の肩にふれて歩めり冬銀河
妻の留守目刺の焦げし頭を残す
初蝶にさゆらぐ心捉え得ず

壱岐の島

東京　赤座典子

奥壱岐の千年の湯に風光る
島風の澄切つてをり鹿尾菜生ふ
無人島断崖絶壁かげろへる
亜麻色の産毛まとひし春の蕗
はこべらや港に面す写真館

おだやかな流れ祈りて流し雛
紙雛胸に抱きしむ飾らずに
飛行機の雲作らずに上昇す
百草園お気に召すまま名のる梅
冬の雨赤い傘ある通夜の家

東京　安部里子

ひよどりと眼の合ふ朝のガラス越し
寒の夜に酔うた男の胴間声
鍋焼ときめて眼鏡をはづしけり
俯いて石ころ蹴つて懐手
春一番フレーム薙ぎて馳け抜けぬ

神奈川　鎌倉喜久恵

肩書はもう何もない日向ぼこ
冴返る高架の下の日本橋
二ヶ月や老身調ひがたき日々
持病といふもののまたもや春を病む
春一番大樹咆哮すると見る

神奈川　木村茂登子

ジュリアンの蕾湧くごと春めけり
ミモザ咲く夫に誘はれ変へる
青空を煙らせるやう枯木立
歌よりも声誉めてをり春炬燵
お風呂場をピッカピカにし春一番

東京　斉藤裕子

笹鳴を打消してゐる午の鐘
やはらかく古城の壕を埋める枯
温室の結露の窓の眠さかな
かさこそと冬の水生動物園
肋骨に収り切れない春が来た

東京　篠田純子

白梅やつぶやきほどの香のもとに
仲見世の人出の中を切山椒
出初式空の彼方のゴム風船
誹諧の出涸らしとなる冬籠
ゐのししや三日坊主の初日記

東京　芝　尚子

こはれさうな心の箱に冬銀河
日脚伸ぶ大江戸線の出入口
ひとときを吾子と手作り紙ひいな
ひとり居に訪ね人あり冬薔薇
春の風邪つかれの残る足の裏

東京　芝宮須磨子

さし入るや箱の兎へ春の月
救急車春は野を越ゆ橋わたり
一村の二寺の仲悪る営巣期
こんぺいたう置くてのひらが擽つたし
今はむかしチッキに木札あたたかし

石川　定梶じょう

二ン月にラベンダー咲く地球かな
ヨチヨチの子を目で追へばいぬふぐり
障子越し紅梅誉める声聴こえ
日脚やや伸びてこの頃旅ごこち
二ン月の富士を見たくて早起きす

埼玉　須賀敏子

啓蟄や達筆を読みあぐねゐる
言ひたきことあり冬の満月隠れたり
鬼やらひ使はぬ部屋は念を入れ
裸木の影くつきりと日脚伸ぶ
地虫出づ杖から伝ふ地の鼓動

東京　鈴木多枝子

初笑

起きてすぐ芋たこなんきん風邪ごこち
たばこ屋の柱暦に猪の子とぶ
眼鏡のつる直す用あり寒の雨
湯気立てて倒れまいとす紙コップ
石（グー）と言ひ紙（パー）を出すなり初笑

埼玉　竹内弘子

春寒

目を凝らし寒星の数増やしけり
春寒や母の写真を探しをり
庭へ来るバレンタインの日の小鳥
山独活をバリリと噛みて負けん気で
引く前の鴨を見にゆく夕まぐれ

東京　田中藤穂

ストーブの脹らむ程や薪を足す
大寒や手玉のやぅに蒸万頭
紅梅や明日より今が良いものを
急磴を登り切りたる紅白梅
アラジンのランプより出づ春の雲

東京　東亜未

二月

枯木立関節筋肉ゆるぎなし
枯野原あした生るるものひそむ
早梅の香つつましひとり居に
白犬のたはむれはしゃぐ春隣
春の雲千の風来ていづくまで

三重　長崎桂子

一人一句

咲き損じたるやうなりし満作は　佐藤喜孝

雪庇爆音たてて落ちにけり　長崎桂子

また空を眺めてをりぬ冬木立　早崎泰江

良寛か一茶かひとり春を待つ　堀内一郎

小春日やチェロの調べの手術室　森山のりこ

初旅はエジプトと決め夢うつつ　森理和

防空壕の出口の父に添ひし冬　吉弘恭子

寒牡丹ひらくは筬の音に似て　渡邉友七

温泉宿ブラックジャック読みはじめ　赤座典子

元朝の顔見合はせてよろしくね　安部里子

風邪気味といふ日本語の曖昧さ　鎌倉喜久恵

３月作品

初明り七十七歳誕生す　木村茂登子

年令を自慢してゐる日向ぼこ　斉藤裕子

冬籠る足にもくすり指があり　定梶じょう

温室に暫し異國をたのしめり　芝　尚子

ゆく年の尾灯の流れ歩道橋　芝宮須磨子

冬帽子生きることから考へる　篠田純子

もう六十まだ六十と梅ひらく　須賀敏子

大寺の三寸余ある霜柱　鈴木多枝子

自転車が小石を弾き春立てり　竹内弘子

冬鳥やこころを去らぬ顔一つ　田中藤穂

寒鴉サンドイッチを誇らしく　東　亜未

喜孝　抄

二・三月 作品より

竹内弘子

二月号作品

米櫃の底のブリキに暮早し　佐藤喜孝

錫を鍍金（めっき）した薄い鉄板、錻力とも書く。湿気を防ぐための「ブリキ」を張った家庭用の「米櫃」は殆どなく、今では白いプラスティック製が一般である。
別に日々の糧である「米櫃」を充すに足る稼ぎ手という意もある。むろん、大経師の作者の「米櫃の底」が見えることはない。誹諧味の濃い作品。

しをしをと歩む良子か寒椿　堀内一郎

上五、がっかりして元気のないこと（新明解辞典）とあるので、結婚して離れ住む娘のことと思い、行って声をかけてやりたい気がした。推量の「か」があるので、事実は、作者の中で生れて消えた憂愁のようなものかもしれないと思いました。

冬の園水音響く方へ行く　森理和

先日「あを」の吟行で深大寺を散策した。
一面の枯のなか水音のする法へ近づくと噴水だった。水は立ち上がってはへたり込み、伸びる力がないようだった。

着ぶくれて幼児の通る磨硝子　赤座典子

金剛砂などで表面に細かい凹凸をつけた不透明な「磨硝子」。寒い外を通る「幼児」が、きれいな毬のように滲んで見えるのかもしれない。

開戦日屋根やが瓦葺きいそぐ　定梶じょう

一九四一年十二月八日未明、ハワイ・オアフ島南岸の海軍基地、真珠湾を日本海軍が奇襲した。新聞（まだ幼くて読めなかったが）ラジオが大騒ぎだった記憶がぼんやりとある。

その後いくたびも戦争があり「開戦日」の三文字だと分りにくいが、太平洋戦争の始まった日だ。六十年余り経ってもアメリカ人は「リメンバー・パール・ハーバー」と言っているらしい。日本人は「リメンバー・ヒロシマ」と思っている。

手のどこの切れたる血やら年の暮　篠田純子

ごく微量だが「手」の触れたところが赤く染まるので、初めてどこかが切れたのだと分かる。「年の暮」の慌ただしさを表して間然するところがありません。

音たてて時の過ぎゆく冬銀河　田中藤穂

昭和とともに呱々の声をあげて誕生され、日中戦争、太平洋戦争、そして敗戦―。そしてふたたび平和がおとずれた。とりあえず武力による国家間の闘争のないのが平和である。

まことに「音たてて過ぎ」ていった歳月だったのだ。「冬銀河」を仰いで感慨を深めておられるのでしょうか。

ゆきずりにラーメン啜るしぐれかな　木村茂登子

吟行句会のお役など、てきぱきとこなされるきっちりした印象とはべつに、こうした東京っ子らしい気安さがある方と思っていました。

山茶花や東司の窓の薄日いろ　吉弘恭子

「東司」は禅寺の便所のこと。その辺りに「山茶花が咲いていて、淡い紅いろが便所の窓に映っているのだろうか。便所と思えない美しい句が出来上がりました。

逢ひにゆく冬風鈴の鳴りやまず　渡邉友七

（くろがねの秋の風鈴鳴りにけり　蛇笏）に較べて切迫感がありますね。一連の句には恋の逃避行のような趣もあって面白いです。

三月号作品

咲き損じたるやうなりし満作は　佐藤喜孝

早春、葉に先立って線形の黄色い四弁花を枝いっぱいにつづる。「満作」の名は「まず咲く」「豊年満作」につながるといわれる。

「書き損じ」ならぬ「咲き損じ」がいい。
四弁の花びらが反りかえったり、皺んだり、上手にひらけないように見えるのを、独自の感覚で表現された。

沈みゆく陽に黒き点寒鴉　　早崎泰江

西空のあかく染まったなか、点々と疎らに飛んでゆくのは、塒へ帰る「寒鴉」である。
渡り鳥はもっと明るいうち、規則的に隊伍をなして飛んで行くようだ。夏の夜、鴉のような啼声で飛んでゆくのは、五位鷺だと教えられた。

大正のほどよき遠さ雛飾る　　堀内一郎

明治（天皇在位期の年号）が四十五年。大正は天皇が病弱だったこともあり十五年と短かったが、自由主義的風潮（大正デモクラシー）がみられ、何よりいまわしい戦争がなかった。
昭和になって、日中戦争、太平洋戦争、敗戦と、わたしたちは未だ曾って無かった事の成り行きに翻弄されどうしだった。
大正年間に生を享けた作者は、よき時代の「ほどよき遠さ」を「雛飾り」つつ懐かしむ。
折しも東京大空襲のあった三月である。

凍て空や鴉のこゑの撥ねかへる　　吉弘恭子

以前、北陸の方から大宮に移転して来た人が、冬はとくに晴れた日が続き毎日蒲団が干せて嬉しいと言っていた。晴れた日は太陽が西に隠れると、カーンと音がするように空が凍てて、鴉の声が撥ねかえって来るようだった。
彼の地では、〝弁当を忘れても傘は忘れるな〟と教えられたそうだ。

寒月の細さたしかめ窓閉ぢぬ　　渡邉友七

一日のおわり、火の元や戸締りをたしかめる。寝に付くまえ、もういちど窓を開けて月の在り処をたしかめた。一家の主として、ずっとそうして来たのである。

冬の空しづしづ浮ぶ飛行船　　安部里子

中空に、音もなく浮ぶ「飛行船」。冬木の少し上をゆっくり動くともなく移動してゆく。船体に大きく文字の描かれたアド・シップである。「しづしづ」がおもしろい。

寒晴や眼鏡のくもり幾度も拭く　鎌倉喜久恵

眼鏡屋の店先に眼鏡の洗滌器が置いてある。通りすがりに手早くきれいに洗滌することができるというサービスだが利用したことはない。
「寒晴」の取り合せが秀逸だと思いました。

発車ベルホロロホールル春隣　木村茂登子

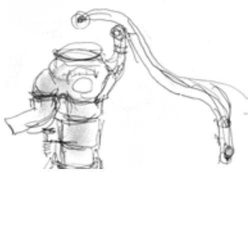
いわゆるオノマトペ（擬声語）の扱いは難しいのですが、作者の耳に「ホロロホールル」と聞える、愛着あるその音を、いつか一句に作りたいと考えていらしたのでしょう。成功したと思います。「春隣」で。

風花やあるとき高くさかのぼり　定梶じょう

どうしても〈流燈や一つにわかにさかのぼる　蛇笏〉を想起させます。天上から降ってきたものが「さかのぼる」。川（海）の流れを「さかのぼる」「あるとり」という言葉にくらべて「一つにはかに」のただならぬ様子、緊迫感に分がありますが、「風花」も魅力のある句です。

火を付けてすぐ吐く煙うす氷　篠田純子

吸う口元も見せず、すぐ吐いても、煙草のけむりは一瞬で脳にゆきわたり、一時的に気を鎮める作用があるそうです。
内田百間は、幼稚園の頃から祖父の煙管を吸い、八十一才で亡くなっています。「うす氷」がいいです。



最初の記憶（二十九）

昭和57年に創立80周年を記念して発行された小冊子「私たちの谷中」をみると、一ページいっぱいに、〝大正三～四年頃の谷中小学校〟として、緻密な手描きの木造校舎、谷中小学校が載っている。手前の三崎坂から、両側の立木をはさんで校門に続く道があり、向って左側の角の家が、母をはじめ叔母や私達きょうだいの出生地。下谷区谷中三崎（さんさき）町五三。小学校と同番地でした。

祖父は、粕壁（いまの春日部）で、震災前まで酒造業をしていた家の七男で、明治の中ごろ谷中に店を構え、小豆や砂糖、鰹節、干椎茸、海苔、雑穀などを商っていました。

大正が終るころ、女学校を出たばかりの母に千住から父が婿養子として入り、間もなく店の半分を米屋にして父に任せたますが、直に坂を少し下った道の向う側に

竹内弘子

米屋を移し、祖父と別になります。下の家といっていました。

朝になると、私が道をわたって上の家へ行くのを店の者が見ていて「○子ちゃんが歩いてくる」といっているうちに転び、口から血が出たので、横抱きにH野先生に走ったそうですが、そのことはよく覚えていません。

例の三十五代横綱双葉山が69連勝で安芸の海に負けた時の、〝安芸の海、安芸の海〟というラジオの連呼は大変なものでした。場所中に一度は観に行く祖父が、ラジオはやかましいと聴かせてくれないので、かわるがわる下の家へ行って聴くのでした。三、四歳の頃ですから、最初の記憶はこの辺りです。

「私たちの谷中」に描いてあるように、小学校の手前には、仕舞屋のほか数軒の店舗が並び少し先にお米やさんもあるので、なぜそんな近くに開業したのか解せないことに思っていました。

先日、あらためて上の姉に訊いたところ、「むかしはパンや麺類を御飯の代りにすることは少なかったのよ」という返事でした。納得できませんでしたが、そういえば戦中戦後、パンや麺類を代用食といっていました。

寺町ということもあって、米や乾物類の需要は多かったようです。そういうことも、先年あい次いで他界した叔母たちに訊いておきたかったことの一つです。

昭和11年、これまでの木造校舎から、今も一部使われている鉄筋コンクリートの地下一階、地上四階の新校舎になりました。翌12年になると、当時としてはめずら

しい学校給食「栄養弁当」が始まり、アルミのお弁当箱に温かい御飯とおかずが入っていた、と姉たちに聞かされましたが、私が一年桜組（女の子が梅と桜、男の子は松と竹、菊が男女組）に入学した昭和16年に太平洋戦争が始まって、校名も谷中國民学校とかわり、栄養弁当どころではなくなりました。

この年、お米が配給制となり、各世帯に米穀通帳が交付され、昭和57年、食糧管理法の改正によって廃止されるまで、どこの家にもあの黒っぽい米穀通帳があったのです。

戦時色の濃くなるなか、二人の姉とその友達に連れられて、浅草であんみつを食べた覚えがあります。その後の食糧事情を考えるとウソのような話です。

昭和19年に学童疎開が始まり、女子供は、上野桜木町に住んでいたK叔母の一家と、祖父の故郷へ縁故疎開ということになり、桜木町の家は、勤労動員のＥ叔母と上の姉が留守番に入りました。空襲のとき、お隣と共有の防空壕に入らず、墓地を抜けて線路に飛び下りて逃げたそうです。三崎（さんさき）の家は、古くから住込みで居る人だけになってしまいました。

３月４日、小学校とその周辺も空襲をうけ、校庭に爆弾の大きな穴があいたそうです。上の姉の通学途中、山の手線で突然、アジアの戦勝国の人が大声を上げたときは、恐怖で震えたそうです。

下の姉にソラマメとからかわれ、写真コンプレックスなのでなるべく蚕豆でない写真にしました。

漢訳蕪村

（春の句）

王　岩

香衣亦未疊　春日正黄昏

原上農夫默々耕　林間古寺撞初鐘

省親帰郷人之夢　尽在煮豆一瞬間

沈々大門扉　春日暮色中

庸々以足脱指貫　溶々春夜月朦朧

焼荒原野上　暁来降細雨、

印金堂邊樹影中　朧々春月杳然昇

匂ひ有（ある）きぬもたゝまず春の暮

畑打や木の間の寺の鐘供養

藪入の夢や小豆のにえる中（うち）

大門のおもき扉や春の暮

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月

しのゝめに小雨降出す焼野哉

春月や印金堂の木の間より

エジプト

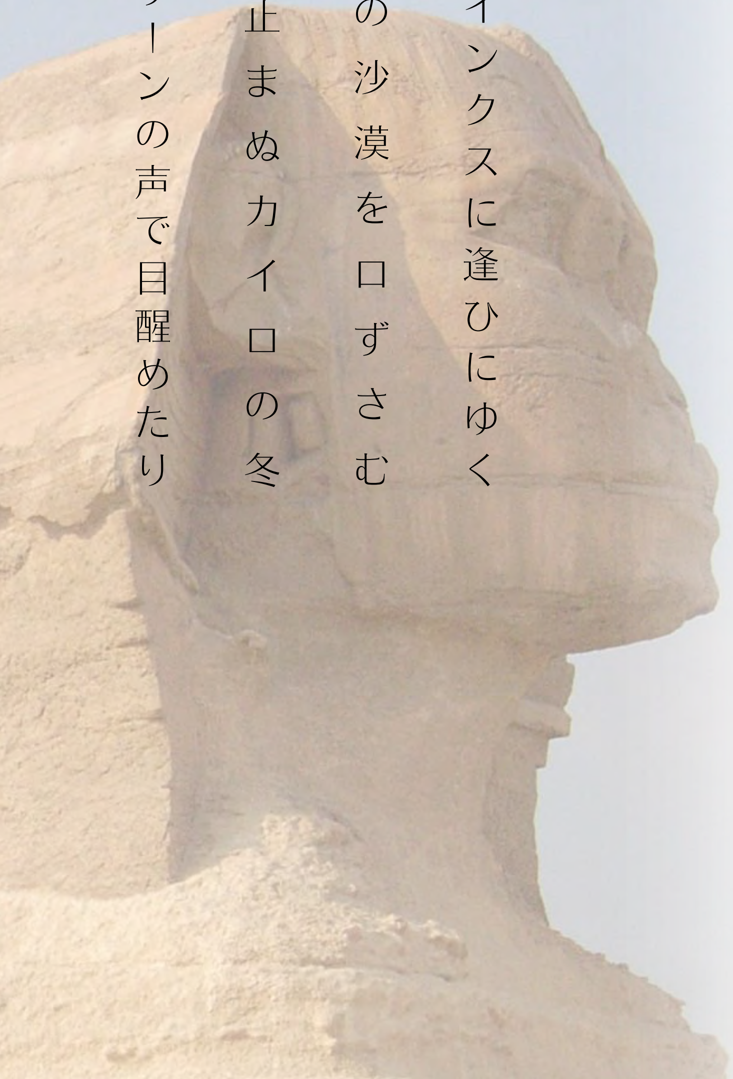
須賀敏子

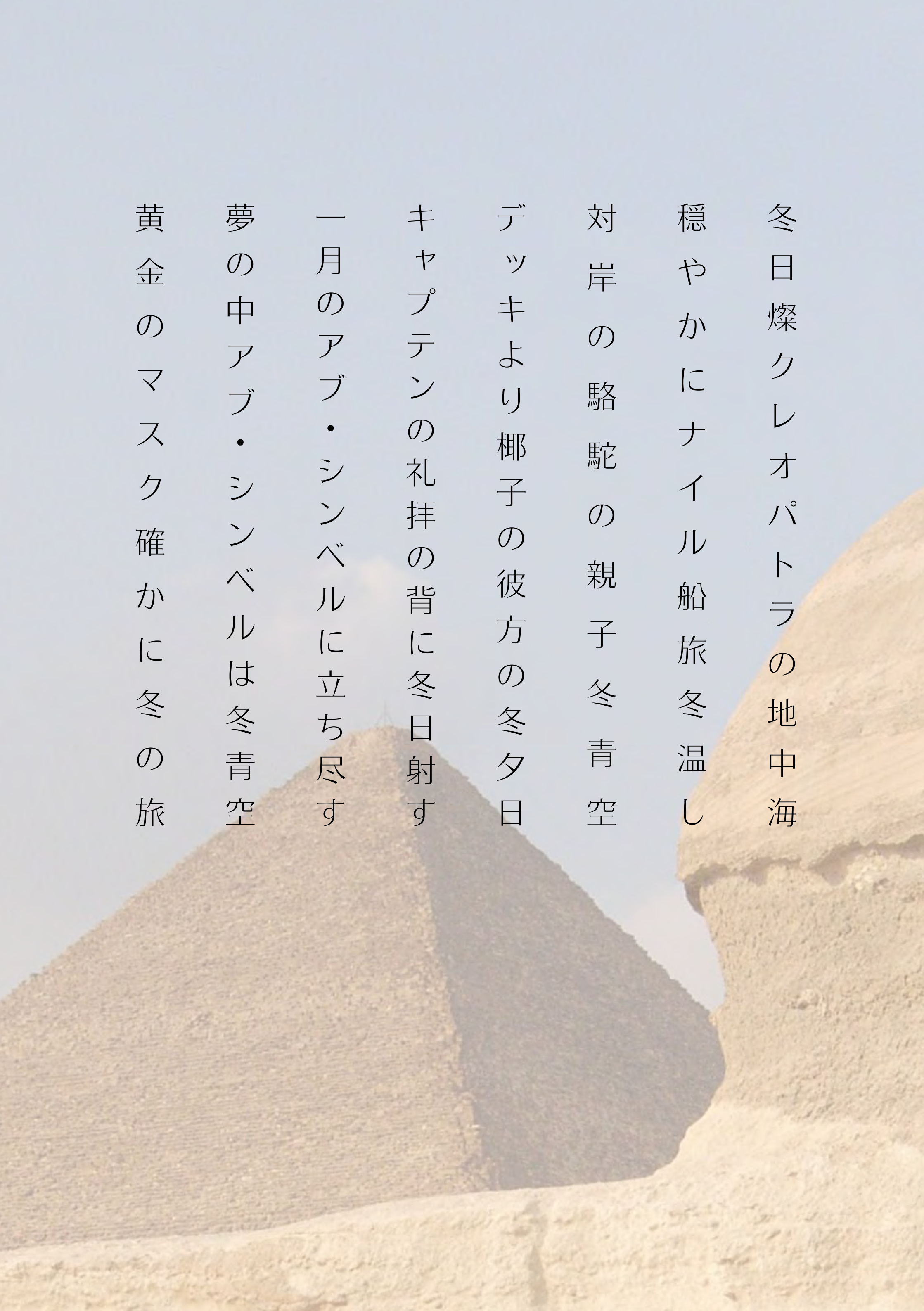
初旅はスフィンクスに逢ひにゆく

初飛行月の沙漠を口ずさむ

人（ひと）車（くるま）警笛止まぬカイロの冬

星冴ゆるアザーンの声で目醒めたり





冬日燦クレオパトラの地中海

穏やかにナイル船旅冬温し

対岸の駱駝の親子冬青空

デッキより椰子の彼方の冬夕日

キャプテンの礼拝の背に冬日射す

一月のアブ・シンベルに立ち尽す

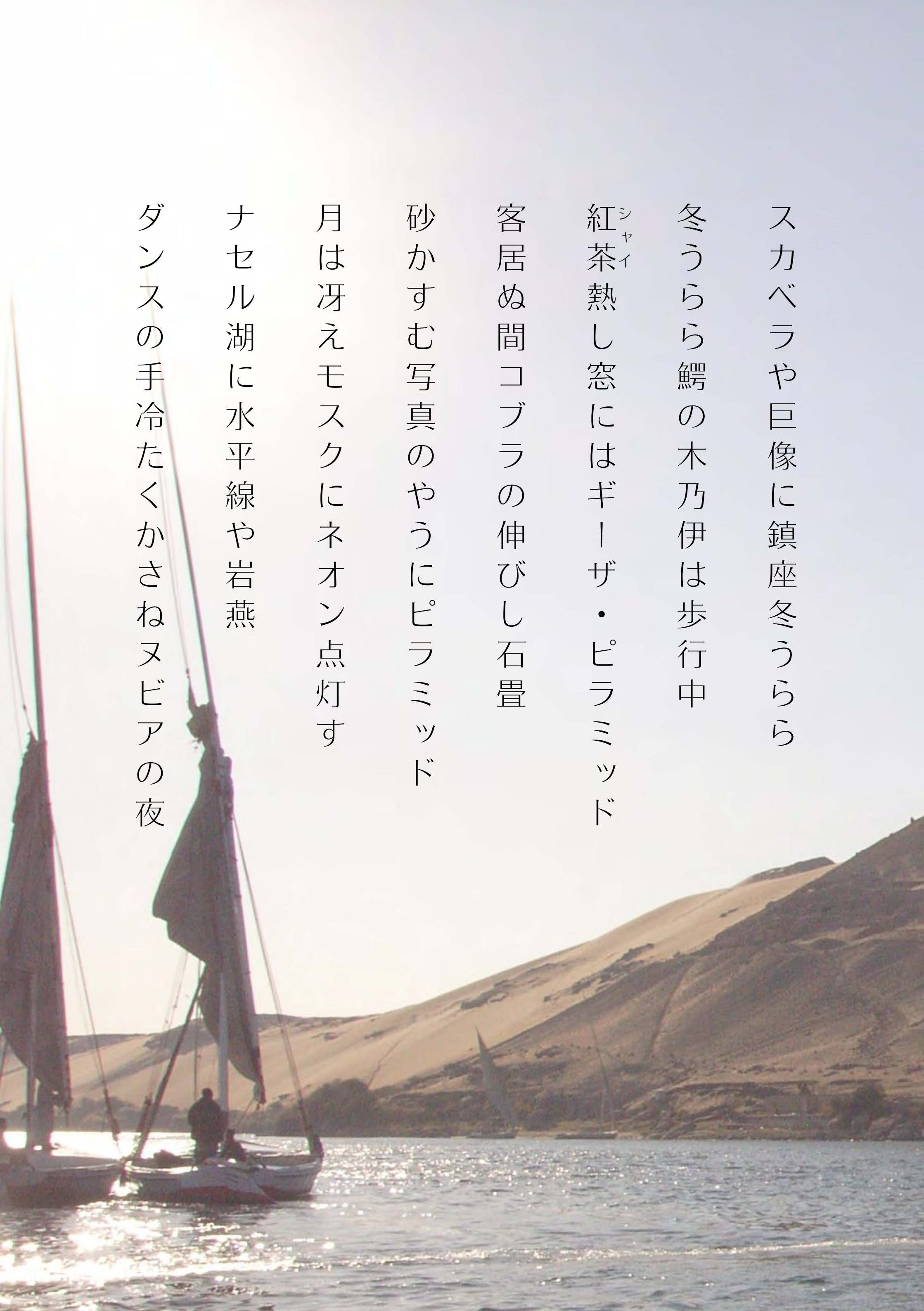
夢の中アブ・シンベルは冬青空

黄金のマスク確かに冬の旅

ナセル湖

アブ・シンベル砂は守りの防腐剤
エジプトに鷺が魚捕る絵文字あり
寒雀日干し煉瓦は穴だらけ
緩やかにナイルは下る冬夕焼

森　理和



スカベラや巨像に鎮座冬うらら

冬うらら鰐の木乃伊は歩行中

紅茶（シャイ）熱し窓にはギーザ・ピラミッド

客居ぬ間コブラの伸びし石畳

砂かすむ写真のやうにピラミッド

月は冴えモスクにネオン点灯す

ナセル湖に水平線や岩燕

ダンスの手冷たくかさねヌビアの夜

特別作品鑑賞　**八の坂**　堀内一郎

吉弘恭子

枯葉から枯葉へ色をかへてゆく

秋になると木々はいっせいに自分の色を出して枯葉へと動きだす。いちょうのあのきれいな黄色には何ともいえない透明さを感じる。また桜の赤色は黄色が交じった独特な色をもって枯れてゆく。枯葉といっても木々それぞれに違う。鮮やかな赤色になって枯色に変っていく葉、すぐに黄色くなり、にぶさのまじった枯色へと変化するもの。木々それぞれに自分の色を持っている。
秋の山々は、春にはない華やかさを感じる。枯葉から枯葉へとたたみ掛ける言回しは、一郎俳句のうまさである。

賀状一枚暮にこの世を去りし人

何時の頃からであろうか、日本では年賀状は十二月の二十五日までに投函しないと元日には届きませんよと言われだした。几帳面な人々にとってそういわれると素直に元日に届いた方が気持

が良いなと思うようになってしまった。
ともするとこの句の様なことがおきてしまう。さびしいことであるが、錯覚を起してしまう。亡くなった気分にはとうていなれずに、いただいた住所に今も居られ賀状から話しかけられているようだ。
やはり年賀状は年が明けてから書きたいものだ。

一月の声真つ直ぐにとどきけり

一月というと日本人にとってその年一年間のはじまりで、気持を新たにして「さあ」と心がまえを秘してはじまる月でもある。
「一月の声真っ直ぐ」は一月から十二月まで暦にはあるが、一月以外にはとても考えられない。考えられないというより一月でなければならないとこの句を読んで感じた。特に日本の冬は体感温度が加味されるのであろう。〝四月の声〟〝八月の声〟はどのように詠まれるのかと想像をかきたてられる。
題にもなった〝枯れ枯れて四の坂八の坂見ゆる〟。「枯れた人」というと若さ、豊かさがなくなるという事になるが、もう一方で長い経験でかち得た深い味をもつという事にもなる。四の坂を見て八の坂をそろそろ通り次の坂へと続く。四の坂には林芙美子、八の坂には瀧春一が住われていた。漢数字を使った両句とも奥行があって一郎俳句は楽しかった。

『さざんか』の巻

さざんかをこぼすあそびをしてをりぬ　喜孝
　庭の枯木に名も知らぬ鳥　富男
数寄屋橋土橋新橋橋なくて　純子
　糸電話から友ちやんの声　恭子
消えがてのネオンの上にかかる月　裕子
　手入れのすみし松の黒影　喜
日展の彫塑の女なまめかし　丈明
　天さす指の白く細くて　富
筆談で示し合はせて昼デート　純
　車道を過る黒猫二匹　弘子
短波にて競馬中継早口に　藤穂
　日曜の夫外に出たまま　里子
月涼し縁台将棋佳境なり　富
　湯屋のほてりに蝙蝠のとぶ　純
つれだちてちよつと立寄るスタンドバー　恭
　小さき染みあるモナリザの頬　裕
仏蘭西に花を咲かせる希ひあり　喜
　代田に映る塔の尖端　弘

春の風みんなでつまむ袋菓子　泰江
　ひとりたのしむ夜のジョギング　里
デトックスはじめてみやう三面鏡　純
　救命丸を置薬とす　恭
雪早し湯沢の町の店あかり　喜
　木枯のなか地の涯（はたて）まで　弘
ハーブティー甘酸つぱくてさみしくて　泰
　手話で伝へる夕べの合図　里
フラダンス腰のあたりのものがたり　純
　コンビニで買ふ超割チケット　裕
海越えて着きしカイロは秋の月　藤
　天高くあり孫にひかれて　東亜未
亡き人の好みし酒をあたためむ　尚子
　座敷ひろびろ外は雨なり　富
枝垂杉水輪に隠る魚の影　恭
　攩網（たも）を片手に踵を返す　弘
坂上の能楽堂の花ふぶき　純
　しばしとどまれ山の鶯　尚

起首　二〇〇五年十二月十八日
満尾　二〇〇七年　四月十五日

あをかき集

雑煮
日脚伸ぶ
箱

堀内一郎　選

（六位以降五十音順）

白味噌は母の好みし京雑煮　森山のりこ
魚沼の餅有難く雑煮椀
小春日や丹念に拭く硯箱
魚市場初荷の箱の堆し
遠富士のくつきり聳え日脚伸ぶ
日脚伸ぶ寄木細工の謎解ける

森山のりこ

「雑煮」は正月には欠かせぬもので皆様から、いろいろ教えられた。大方母が思いの中にあって微笑ましい。年のせいであっさりが好みになってきた。のりこ作品はそのあたりにある。何れも平明に見えるが各風景に滋味を滲ませる。

幾つにします問うて焼き出す雑煮餅
箱膳やほんのり甘き京雑煮
日脚伸ぶ上機嫌なり今日の母
置場所を替へてみやうか日脚伸ぶ

森　理和

日脚伸ぶ骨董市にしやがみ込む
文箱の漆の剥れ福寿草
金沢は箱階段に雪明り
禁酒後の幾日も過ぎ日脚伸ぶ

定梶じょう

日脚伸びる岬は沖へのびにけり
居酒屋に灯の入る時間日脚伸ぶ
針箱に耳かきがあり不思議な冬
雑煮椀ものぐさ太郎おかはりし

須賀敏子

日脚伸ぶ畳の部屋のおもちや箱
日脚伸ぶ自己主張する枝と枝
日替りで丸と四角の雑煮餅
箱膳で年越をする昭和かな

森　理和

積極行動的て気遣いが底流している。過剰な面もあるが若さであろう。「今日の母」に手を挙げる。

定梶じょう

「箱階段」では、明解で雪国の風景生活を彷彿させる。あをかき集中ピカ一と私は思う。
禁酒、居酒屋、針箱はストレスの所産かも。男の哀愁をそれとなく。

須賀　敏子

「おもちや箱」から団欒が伝わる。自然との呼吸も来し方への思いも。そして「豹柄の」と変身も忘れない女性の夢への力強さを感じた。

赤座典子

豹柄のセーター未だ箱の中
初春の金時山より箱根まで
小さき餅脇役めける雑煮かな　赤座典子
じぐざくと子等の自転車日脚伸ぶ
日脚伸ぶ手足ひらひら乳母車
冬館堆朱の文箱古びをり
箱庭に葉の深緑福寿草
箱書の達筆に見ゆ寒ぬくし
雑煮食む冬菜三つ葉とゆず入れて　安部里子
日脚伸ぶ絵を観に友と上野まで
日脚伸ぶ日のたつぷりと波郷の墓
一月やへその緒入れた桐の箱
冬座敷カステラの箱仏壇に
酒を煮る雑煮の出来る間を惜しみ　鎌倉喜久恵
国ぶりの白味噌に柚子雑煮餅
食卓に読みさしの本日脚伸ぶ

表現少し固いと思われるが、対象に一途である。乳母車の光りは印象深く、後の三句は古格に徹して重さ十分。「めける」は消したいところ。

安部里子

「波郷の墓」に少々手を入れたが深大寺の麗かな風景が見えて味読できる。「へその緒」に驚いたが「カステラ」が一句を和ませている。

鎌倉喜久恵

一人暮しを感じるが、楽しく日々を過している。好きな書物を友として。「箱の膳」があの世この世の懸け橋に。

木村茂登子

「八ッ頭」も縁起物で同格でこの句は決まり。「神の足」も処を得ている。

太き鰤躍りて木箱にをさまらず
先の世にたちし人にも箱の膳
お雑煮の餅は一ト切具沢山　　木村茂登子
お雑煮の餅と同格八ッ頭
箱根駅伝のぼりトップは神の足
日脚伸ぶ立ち読み咎められもせず
銭湯へ通ひなれたる日脚伸ぶ
点滴に冬日の届く箱の部屋　　篠田純子
採用の内定通知日脚伸ぶ
雑煮餅明治生まれのこわきこと
九州の人に嫁ぎし子の雑煮
箱みたいなマンションライフ初日の出
お雑煮や父母のこのみしあはの餅　　芝　尚子
身の丈の暮らしに馴れて日脚伸ぶ
今にして判子ごとあり日脚伸ぶ
子の手にもチョコレートの箱バレンタイン

この閃めきを大切に。

篠田　純子

「明治生れ」のこわきは厳格近づき難さであろう。時代背景を思わせる佳品。「九州の人」は隔たった子への親心であり、「初日の出」は今を然りと見つめる。

芝　尚子

「身の丈」とは自身に合ったと言うことであり地味な生活、安泰な日々。判子ごととは由々しきこと。日脚伸ぶと流すが心中は計り知れない。「面箱」は遺る作品になりそう。この渋さに魅せられた。

芝宮須磨子

「心の箱」の不安感は誰しもあるし、「初護摩会」に運命の彩りも頷ける。

面箱より翁取り出す能初め

芝宮須磨子

こはれさうな心の箱や冬銀河
生国の雑煮のきまり語る人
ゆくりなき出合ひもありし初護摩会
日脚伸ぶ大江戸線の出入り口
日脚伸ぶ学童保育の帰へり道

鈴木多枝子

雀らの小さき諍ひ日脚伸ぶ
先のことは考へまいと日脚伸ぶ
昼過ぎの空箱叩く冬の雨
アイデアの二転三転日脚伸ぶ
自問自答多くなりしや日脚伸ぶ

田中藤穂

鶏の味濃き雪国の雑煮かな
雑煮椀越のホテルの客素朴
不忍池へ暗闇坂の日脚伸ぶ
鮟鱇のはみ出す箱をひきずれり
寒い港クレーンの吊る箱は何

しかし作者は到って冷静、周囲に溶け込んでいる。「日脚伸ぶ」に平安な日々。

鈴木多枝子

「小さき諍ひ」は昨今の世情にも通はて妙である。

「先のこと」加齢による、うらみつらみは同感で、容赦なく日脚は伸びる。「アイデア」「自問自答」の心掛けには尊敬する。「昼過ぎ」のさりげなさは佳品と思う。

田中藤穂

雑煮は地方色が似合うようだ。それは都会の食生活の変化にも原因はあると思う。うちの方にも暗闇坂はあるがこのスケールには適わない。作者の心の明暗を感じた。鮟鱇・クレーン、強いものに惹かれるのは脱皮と言うか向上心の現れ。

夫白虎われは玄武に雑煮餅　東亜未
雑煮には母の思ひ出薄化粧
元日の重箱たのみとする朝寝
箱到着泥付大根葱人参
新年やパンドラの箱あはて閉め

ほころびで雑煮を祝ふ顔揃ふ　長崎桂子
丸餅はこの地の慣ひ雑煮膳
波頭しづかに返す日脚伸ぶ
風ゆるむ物干竿に日脚伸ぶ
勿体無い空箱細工冬籠り

荒川を渡る電車や日脚伸ぶ　早崎泰江
日脚伸ぶ鳥陰動く石だたみ
丸餅の慣ひ捨て得ぬ雑煮かな
三日過ぎ空箱のごと静まりぬ
空箱に猫丸まつて日向ぼこ
盛り塩のすこしくづれし日脚伸ぶ　吉弘恭子

東亜未

白虎、玄武は中国の四神で東西南北を示す。白虎は西、玄武は北方。因みに東は青龍、朱雀を南とする。作者が北に構えたのは寒い位置で遜譲の配慮か。厳粛な正月の雰囲気に。

朝寝・泥付のリラックスが一連作品に減り張りを付けた。

長崎桂子

「顔揃ふ」で、ほころびは要らない。ここの入れ物で句は一転する。それもありきたりなものが良いようだ。

「日脚伸ぶ」の「波頭」は鮮明で一連の中で呼吸をしている。

早崎泰江

「荒川」が作者を語る。平明だが読者に安らぎを与える。俳句はそれでいいと

夫白虎われは玄武に雑煮餅
雑煮には母の思ひ出薄化粧
元日の重箱たのみとする朝寝
箱 到 着 泥 付 大 根 葱 人 参
新年やパンドラの箱あはて閉め

東　亜　未

ほころびで雑煮を祝ふ顔揃ふ
丸餅はこの地の慣ひ雑煮膳
波頭しづかに返す日脚伸ぶ
風ゆるむ物干竿に日脚伸ぶ
勿体無い空箱細工冬籠り

長崎桂子

荒川を渡る電車や日脚伸ぶ
日脚伸ぶ鳥陰動く石だたみ
丸餅の慣ひ捨て得ぬ雑煮かな
三日過ぎ空箱のごと静まりぬ
空箱に猫丸まつて日向ぼこ

早崎泰江

盛り塩のすこしくづれし日脚伸ぶ

吉弘恭子

東亜未

白虎、玄武は中国の四神で東西南北を示す。白虎は西、玄武は北方。因みに東は青龍、朱雀を南とする。作者が北に構えたのは寒い位置で遜譲の配慮か。厳粛な正月の雰囲気に。

朝寝・泥付のリラックスが一連作品に減り張りを付けた。

長崎桂子

「顔揃ふ」で、ほころびは要らない。ここの入れ物で句は一転する。それもありきたりなものが良いようだ。

「日脚伸ぶ」の「波頭」は鮮明で一連の中で呼吸をしている。

早崎泰江

「荒川」が作者を語る。平明だが読者に安らぎを与える。俳句はそれでいいと

駒下駄の箱に冬日を入れてをく
浮き沈みなけれ地球や日脚伸ぶ
足痺れ御屠蘇昆布巻雑煮椀
まづまづに今日といふ日の日脚伸ぶ
山のおと海川のおと雑煮椀

佐藤喜孝

日脚伸ぶ水のとなりにいま坐る
心臓運ぶ緑の箱に五月の陽
お雑煮の餅こげやすきトースター

竹内弘子

マンションの非常階段日脚伸ぶ
古雑誌隙なく詰めしみかん箱
何や彼やふたりになりし雑煮かな

堀内一郎

白か黒かパンダの足裏日脚伸ぶ
丸い箱四角い箱とバレンタイン

私は思っている。作意は二の次に。

吉弘恭子

「盛り塩」に目を凝らすと風の動きも感じられる。細部に気のつく、それが芸の細かさに繋がるようだ。温暖化を気遣い痺れをきらしたりするが案外太っ腹。

二月の句会

傳句会　　中野区　カフェ傳

三毛のあと黒のつづけり青き踏む　敦子
残雪や藪の形を留めをり　裕子
自転車が小石を弾き春立てり　弘子
風花に漂ふ思慕や遠汽笛　寒林
話すこと何もなき夜春の雷　綾子
訪ね行き訪ね来て春始りぬ　典子
大寒や手玉のやうに蒸万頭　東亜未
まつさきに朝がとびつく猫柳　喜孝
目を凝らし寒星の数増やしけり　藤穂
滲み初む木々に息吹の春疾風　理和
気に掛かる門扉の軋み猫柳　敏子
紙袋両手に余り日脚伸ぶ　恭子
ひよの嘴みかんの汁の光りをり　泰江
シェーカーの8の残像春立つ日　純子
憂国てふ重たき言葉菜の花忌　茂登子
曇天のはたりと暮れて冬ぬくし　喜久恵

調句会　　さいたま市 岸町公民館

鶏の味濃き新潟の雑煮かな　藤穂
休診の貼紙のあり年暮るる　泰江
一月の色紙に夢の一字かな　綾子

福達磨抱かれて通る裏銀座　敦子
石(グー)と言ひ紙(パー)を出すなり初笑　弘子

あを林檎　　ブーケ21

開け閉ての小言がふえし二月かな　弘子
冬の雨赤い傘さす通夜の客　里子
山独活をバリッと噛みて負けん気で　藤穂
笹鳴を打ち消す昼の寺の鐘　純子
楪のあへか紅あるひと日かな　恭子
紅梅や明日より今日が良いものを　東亜未
落椿向きを変へたる錦鯉　喜孝

七座句会　　中野区　小川苑

細魚からうすき烟の出はじめし　喜孝
温室のうつぼかづらの水怖し　東亜未
黒白の服着て雛の家を出る　夏子
春めくや杖より伝ふ地の鼓動　多枝子
添ひ立ちて享保雛の無表情　藤穂
日脚伸ぶ大江戸線の出入口　須磨子
風花や出さずじまひの角封筒　恭子
猫柳それから先は知らなくて　理和
寒食や父の齢の倍も生き　木枯
白梅やつぶやきほどの香の出づる　尚子

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
(03-3368-4263)

調句会　毎月第3木曜
岸町公民館　竹内弘子
(0488-86-3501)

あを林檎　偶数月第3日曜
京橋プラザ三号室
篠田純子 (5250-2776)

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
(090-9839-3943)

あを吟行会
国立自然教育園（五月）
奇数月　第3日曜

わたしは定梶じょうさんの俳句愛読者の一人である。しかし、じょうさんはどういう俳歴の持主か。小人数の「あを」になぜ活躍されて下さるのか。「定梶」をどう読むのか。分っていることといえばお年が私よりちょっと年長らしいということぐらいである。つい最近、「じょうかじ」と読むとお手紙で知った。「あを作品」は五十音順で並んでいるので位置から推測して「さだかじ」と読まれているなとほくそ笑んでおられたのだろう。先月の特作に「春一番半島ここで折れまがり」があった。お住いの輪島市は能登半島が丁度折れまがったように向きを変えるところである。郷土愛から生まれた句と拝読した。

3月25日午前9時42分頃、能登半島沖を震源とする地震（M6.9）が発生。輪島市門前町は大きな被害があった。テレビに映し出される被害の様は想像に余りある。二日ほどして定梶さんに電話をした。つながったのは4月1日。お元気な声でホッとした。屋根瓦が全部落ちたという。冷まじい光景であったろうが、この辺りが全てそういう状態だからと電話口で泰然とした口調で答えられた。

最初の記憶、予定よりだいぶ遅れている。「あを」に発表された句は、一人少なくとも八百句位ある。30句を文章と合わせて載せる計画だが、選んでいるうちに30句では勿体なくなった。そこで50句に変更します。まだ提出されていない方はお願いします。また文章をまだ書かれていない方も間に合いますので寄稿して下さい。

連句を勉強すればなにか得ることがあるのではとはじめた。「あを林檎句会」の残り時間を利用してのことでやっと歌仙を仕上げた。あまりに長い期間だったので、その間退会された方もおられ残念なことである。が、実際に参考書と首っ引きでよちよち歩きをしているうち、それなりの歌仙への考えがまとまってきたような気がする。今号に掲載した「さざんかの巻」を出発点とし同好の方と勉強会を持ちたいと思った。

（喜孝）

二〇〇七年四月号
四月十八日
発行所　東京都中野区中央2-50-3　佐藤喜孝
電話　090-9828-4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。